

ロイヤル・ティレル博物館 (The Royal Tyrrell Museum of Palaeontology)

木村 喜代志

カナダ観光局発行の機関誌に、巨大な恐竜に微笑みながら語りかける少女の写真があった。そこには恐竜と人間との間に時間的空間は全く感じられなかった。以来、子ども心を虜にする恐竜への興味が増し、恐竜の里・ドラムヘラーを強く意識するようになった。

‘06/3 カナダ山岳会の全面的なご協力を得た、日本山岳会アルパインスキークラブがカナディアンロッキーのワプタ氷原トラバースとロジャーパスでの山スキー行の一員として参加する機会に恵まれた。この時、ドラムヘラーへの表玄関口カルガリーを通りながらも、カナダ山岳会本部のあるケンモアを拠点として行動したためドラムヘラー行を断念せざるを得なかった。若い時と異なり年を重ねると、1度掴み損ねた機会はなかなか巡ってこなくなる。ところが、2年後の今年(‘08/2~3)、またもカナダ山岳会の全面的な協力の下、コロンビア山脈のフェアリーメドローハットを寝倉にして、氷河と林間滑降に加わる幸運に恵まれた。

このまたとない機会を逃す手はなく、鶴岡から参加の2名が、先にカルガリー入りし、恐竜と対面してから本隊に合流する計画を立てた。日本を出発する前、ロイヤル・ティレル博物館を中心に1泊2日の”ダイナソールトレールアドベンチャーツアー”が、カルガリー発着であることをインターネットで知った。早速、ツアー会社に申し込んだが、この時期は催行人数の応募は無理ということで色よい返事はもらえなかった。

カルガリー入りした日からホテルのフロントを通してツアー参加を申し込んだ。個人だと車でなければ回れないバッドランドや浸食によって形成された奇岩のフードゥーなどなどを訪れてみたかった。しかし、2月という季節柄、人数不足により催行の可能性が殆どないことを知り、グレーハンドバスターミナルでドラムヘラー行のバス時間を調べ、博物館だけに的を絞って出掛けることにした。バスは1日1往復だった。車体は立派で乗り心地は上々だが、乗客は少なく日本の過疎地を思い起させるものがあった。

アルバータ州最大の都市、人口100万のカルガリーは、厳しい冬の寒さ対策として、ビル同士が空中回廊で結ばれた近代都市だった。2年前に比較すると都市周辺部に真新しい集合住宅、1個建て住宅が広がっていた。とはいっても郊外に1歩でると、所々の吹き溜まりに雪を残す広漠とした平原が続いていた。大きく波打つ大地は、氷河後退による地形だろうか。見えてくる農家の納屋には大型農機と並んで時折セスナも見える。偶に、放牧中の牛の群れも現れるが、どれも平原の広さを強調するものに過ぎな

かった。

カルガリーから 140 km、人口 6.000 人のドラムヘラーは、通りに平屋が並び、窓枠とドアが目立つペンキ塗りで西部劇にでてくる街を髣髴させるものがあった。バス発着場所は街角の雑貨屋を間借りしており、清涼飲料などの看板上方に小さな表示があるだけだった。可愛い色彩と形の恐竜のモニュメントと案内板に導かれてインフォメーションに行く。20mを越すコンクリート製のテラノサウルスが天にむかって大きく口を開き、牙を剥きだしにして迎えてくれたが、生憎の定休日だった。

街でランチを摂ってからタクシーで博物館に向う。レッドディアー川沿いの単調な 1 本道だった。周りの色彩が灰色気味になると幹線道路から右折した。生茂る樹木も住む人もなく、足を取られそうな縞模様の地層が広がり、見るからにバッドランド、荒地だった。

隠し砦のように博物館があった。古生物専門の博物館で 200 点もの展示物があり、50 体以上の完全な恐竜の骨格は世界最高水準だという。開館は'85 年とあった。ロイヤル・ティレル博物館の名称は、アルバータ州中部の石炭と鉱床調査に政府から派遣された地質学者、J. B. Tyrrell の名前に由来しているという。バッドランド調査中キャンプ近くの川辺で肉食恐竜の頭部の化石を発見した功績に因んでいる。この地がカナダで恐竜の化石が最も見つかるところで、これまで 20 種類以上を数え、毎年、新しい化石が発見され続けているという。そして、過去の生態系が自然のまま残されていることからミッドランド州立恐竜自然公園として、'79 年に世界遺産の指定を受けていると聞いた。

博物館に入ると直ぐ「白亜紀のアルバータ州」ということで、植物の生茂る中に牙を剥きだしの恐竜がいた。しかし、リアルだけに何か冷めた気持でカメラのシャッターを切った。次のコーナーに恐竜の巨大な脚の化石が立っており、“Hands On”と書かれていた。実感として捉えることの出来ない時を経たもの感触は予想以上にひんやりとしていた。

前方に一際明るいガラス張りの部屋があった。石膏で固められて持ち込まれた化石を石から掘り起こす作業、クリーニングと称される作業所であった。防塵マスクにメガネ姿で、歯治療機器の様なものを使っての細かい作業の様子を見ることができた。現在持ち込まれている化石だけでも 50 余年分の作業量になるというから、出土する化石の量はかなりのものらしい。

一段と照明を落としたコーナーに、最強の肉食恐竜といわれているテラノサウルスの黒味を帯びた茶褐色の完全な骨格があった。ここまで歩いてきて突然動きを止めたように臨場感溢れる姿で立っていた。恐竜は仮想の動物ではないことは解かるが、想像を超える遠い遠い昔に生息していたであろう動物くらいに思い続けてきた。しかし、今、目の前にしている完全な骨格は、巨大動物の時代へタイムスリップするのではなく、時空を超えて突然恐竜が現れたように思えた。巨大な骨の集りながらも不思議と

気味悪さもなければ恐ろしさも湧いてこない。驚きに似た感動が体の自由を奪いしばらくの間身動きすることなく対面し続けた。

中二階へのスロープを進むと右下に恐竜ホールを見下ろせた。数えることもままならない恐竜群に興奮している自分に気付いた。二階は先カンブリア時代から古生代の展示で、三葉虫とアンモナイト以外に知っている生物がいなかった。

恐竜ホールの骨格だけの恐竜たちは、強さ凶暴さを強調するかのようには牙を剥きだしたものの、長い首と尻尾の巨大なもの、剣先で背中を飾ったもの、三本角をもち強靱な外皮をまとったもの、円形の巨大な背びれをもつものなどなどが、威嚇するポーズ、闘っている様子、のんびり歩む姿、格闘体制、営巣などの姿で埋め尽くされていた。そこには無機質の化石ながら動きがあった。無味乾燥な感じはなく、ドラマチックでさえあった。

スピルバーグ監督がジュラシックパークの構想を練ったとされるコスタリカの熱帯雲霧林に5年ほど前に行ったことがある。熱帯雨林より湿度が高いため1本の樹木に2、300種類の着生植物が見られるところだった。陽光が射し込んでくるとありとあらゆる植物が、一斉に光にむかって動き出すような錯覚にとらわれ、身を置くだけで汗が滲み出てくるところだった。さまざまな植物が密生し、大きな樹木は苔に覆われ、その苔から他の植物が芽を吹き、花を咲かせていた。つるが垂れ下がり見通しは効かない。何処から恐竜が姿を現しても受け入れてしまいそうところだった。目の前にしている恐竜たちが動き回っていた中生代の環境は、今日の熱帯雲霧林のような幽玄な世界であったのだろう。しかし、化石として生まれ変わった姿には、雲霧林よりも簡素で大きな展示場が相応しい場所に思えた。そして、動き出さんばかりの姿は、遠い昔の生きものというより、明日にでもその辺で出会える身近な動物に思えた。興奮引きずったままにベアパー・シーというトンネルのような通路には、海洋爬虫類の骨格が展示されていた。

数億年にわたり繁栄し続けた巨大動物がある時期を境に、短期間のうちに絶滅したことも信じがたい。原因は諸説あるなかで巨大隕石の地球衝突説が最有力視されている。いずれにしても地球環境の変化が恐竜の運命に大きな影響したことだけは確かといえる。また、いかなる生き物も生きるための最大の武器が逆に命取りになることもあり、進化の果てにあるものは絶滅であると聞いた。恐竜は巨体であり、マンモスは巨大な牙であったという。現在、地球上で繁栄し続けている「ヒト」の最大の武器は何だろうか。既に地球上の全ての生物を数回も死に追いやるだけの核兵器を9カ国に分散して所有しているし、地球温暖化と共に大気汚染はじめ数々の公害が環境変化の度合いを年々大きくしている昨今である。巨大で、あまりにも完全な恐竜の化石は、絶滅後の姿として黙して何かを語りかけているようにも思えた。

(27 Feb. '08)

ロイヤルティレル博物館 (ROYAL TYRRELL MUSEUM)

カルガリーとカルガリー国際空港から車で 90 分のドラムヘラー郊外 6 km、ミッドランド州立公園内にある。

バスはカルガリーグレーハンドバスターミナルからドラムヘラー1日1往復(カルガリー発 8:35、ドラムヘラー発 17:30) 所要時間片道 100~110 分

開館時間：夏季(5/21~9/5) 9:00~21:00(毎日)

秋季(9/6~10/10) 10:00~17:00(毎日)

冬季(10/11~5/19) 10:00~17:00(火~日。祭日以外の月曜休館。12/24・25、1/1 休館)

住 所：P. O. Box 7500, Drumheller, AB, T0J0Y0 Tel. 403-823-7131

Email : tyrrell.info@gov.ab.ca

Website : www.tyrrellmuseum.com